

Title	シドニー・ポラールド著 シェフィールドにおける労働の歴史
Sub Title	A history of labour in Sheffield, by Sidney Pollard
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.9 (1961. 9) ,p.828(96)- 832(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19610901-0096
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610901-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

シドニー・ポラールド著
『シェフィールドにおける労働の歴史』

(Sidney Pollard; A History of Labour
in Sheffield, 1959, Liverpool, pp. xix+372,
35s. net.)

飯田 鼎

イギリスにおける労働運動史研究は、たとえばシドニー・ウェッブ等の古典的・史料的研究や、あるいはG・D・H・コールにみられたような社会運動史ないしは社会思想史的な視角からする通史的な研究とは別に、非常に実証的にして新たな問題意識を提示しつつ、とくに労働者階級の歴史に接近しようとするすぐれた研究があらわれつつある。たとえばウェッブの研究においては、労働組合の生成とその発展過程が長大な史料の集積の上に克明に追求されているにもかかわらず、労働組合の形成に大きな関係を有する労働者階級の生活条件の地域的な差異などは必ずしも明らかにされず、またコールの業績は労働者階級の運動とイデオロギーとの関係を知る上には便利な本であるが、労働組合の組織についての問題、たとえ

ば、チャーティスト運動についてはかなりくわしい分析をしているけれども、その背後で職業別組合がどのようにして全国的に形成されはじめたかという点などは、まったく明らかにされていない。

イギリス労働運動史および社会運動史にかんする最近の研究動向として(一)運動の地方的な基盤が重視されてきたこと、そして(二)たんに包括的通史的なものではなく、一地方もしくはひとつの産業を中心とする特殊な研究があらわれつつあることである。そしてポラールドのこの労作も、いわばいままでの研究の古い伝統を打ち破るあたらしい研究として注目すべきである。

著者ポラールドは、シェフィールド大学の経済史講師であり、最近に書いた協同組合運動にかんする研究は好論文として注目をひいたが、何よりも、労働者階級の運動に熱烈な関心を示し、帝国主義段階における労働者階級の運動に、鋭利な分析を試みている点などは、わが国のいわゆる社会経済史学派の人々が、経済史の研究といえは産業革命期の一八三〇年までであると考へ、資本主義の自由競争的な段階から帝国主義段階にかけての労働問題をまったく閑却しているのとは、非常に対照的である。これはひとつには、わが国の経済史学者が、その史料的研究に熱中しすぎた結果、ともすれば、真理の探求に志す者にとってもっとも基本的な態度ともいふべき現実的な課題への関心の欠乏、問題意識の欠如、いかえらば、訓詁的解釈学からおこった現象であって、『大塚史学』の如きは、実にその数少ない例外であるといわなければならない。従っ

て本書は、何よりもいわゆる社会経済史学者によってこそ熟読玩味されるべき力作である。

本書の書評としては、すでにエコノミック・ジャーナルにのせられたアサ・ブリッグス (Ass Briggs) と、法政大学の徳永重良氏があるが、全体的な評価としてはともかく、個々の点では異なる面もあるので、敢えて批評を試みるのである。目次を紹介すれば、つぎのような内容から成っている。

- 第一部、十九世紀半ばにおけるシェフィールドとその産業。
 - 一、一八五〇年のシェフィールド。
 - 二、蒸気機関の時代の開始期におけるシェフィールドの軽工業部門の職業。
 - 三、ベッセマー法以前の製鋼業。
- 第二部、ヴィクトリア中期の発展と大不況、一八五〇—一八九三年。
 - 四、その産業革命の時期におけるシェフィールド。
 - 五、シェフィールド産業の黄金時代の終焉。
 - 六、近代製鋼業の誕生。
 - 七、自由主義の時代の終末におけるシェフィールド。
 - 八、過渡期の軽工業。
 - 九、鉄鋼、機械業および軍備。
- 第四部、戦争と戦争中の時期。

書評

一〇、戦争と不況のときのシェフィールド。
一一、重工業における好況と停滞。
一二、不況時における軽工業部門の職業。
目次をみれば明らかなように、この労作は十九世紀の五〇年代から一九三〇年代までのシェフィールドを中心とする産業とこれに従事する労働者階級の歴史である。本書の題名が「労働者階級の歴史」ではなく、「労働の歴史」となっているのは、産業組織や職能別組合との関係、労働者階級の生活条件を描写するにとどまらず、さらにすすんでその生活環境の変化にも考察を加えており、全体として、産業革命以前、産業革命期以後ヴィクトリア時代、自由競争的な段階から帝国主義段階、第一次世界大戦勃発の時期から第二次世界大戦の時期という時代区分からみて、著者にはマルクス主義的な方法論の影響が感じられる。

シェフィールドは、刃物業の産地として有名であるが、著者はまず、第一部では一八五〇年代のこの町の劣悪な生活条件を、ひどい衛生状態、すなわち、煤煙の害、未整理の墓地、不完全な水道の設備やガス施設、貧弱な住宅という面から克明に追求している (pp. 8-23)。ここで興味深いことは、エンゲルスの「イギリス労働者階級の状態」のなかでのべられたマンチェスターと比較した場合、シェフィールドは、それほど悲惨な様相を呈しなかったようで、ひとつには、マンチェスターと異なり、アイルランド人問題が深刻でなく、従って熟練労働者の比重がたかかったことにもよるのであろう。

一八五〇年代のシェフィールドは圧倒的に熟練職人 (artisan) の都市であり、主としてアダム・スミスの「国富論」にみられたビーン製造のようなマニユファクチュアを生産の基礎とする軽工業に従事していた。著者は、この軽工業をつぎの三つに分ける。(一)刃物類、指物師の道具、やすり、機械工の道具、鋸、スケート靴、ピン、針、農業器具などの財貨をつくる職業、(二)銀、銀器類およびそれと結びついた職業、(三)ハンドルや飾り糊などいろいろな補助的な仕事に従事していた人々などである。著者は、蒸気機関の開始期におけるシェフィールドを、軽工業が圧倒的な比重をもつ工業都市として描きながら、その後の変容をきわめて豊富な資料をもって追求しているのであるが、本書を読んでもっとも強く印象づけられることは、(一)いわゆる産業革命が、このシェフィールドに及ぼした影響であり、つぎに(二)そうした場合、技術革新によってその労働力の価値が相対的におしきげられてゆかざるをえなかった熟練労働者と、シェフィールドの軽工業から重工業への発展にもなつて発生する近代的なプロレタリアートとの矛盾、すなわち、熟練労働力を基幹労働力とする刃物業を中心とする軽工業と中小企業と、このような中小企業の残存と豊富な労働力の存在を基盤としつつ、下請化をおしすすめる重工業と大企業との関係、それは同時にまた職能別組合の産業別組合への発展および再編成の過程でもあった。この点の描写は実にすばらしい。そして最後に、(三)本書の特徴は、著者がシェフィールドの環境衛生とこれに関係のある地方政治に実に熱烈な関

心を示していることである。

まず産業革命のシェフィールドの産業および労働者に及ぼした影響であるが、産業革命という社会的経済的大変動は、一般に十九世紀前半、とくに一八四八年の革命以前に完了をみたというのが通説となつてはいるが、著者ポラードは、むしろシェフィールドにおける産業革命の起点を一八五〇年代に求めていることは深く味わうべきことといわなければならない。なぜなら、十八世紀の終末にはじまった産業革命は、マンチェスター周辺のランカシア地方の繊維産業を中心としていたが、金属工業の中心地シェフィールドでは、産業革命の一般的な諸特徴と思われる現象、たとえば、機械制大工業の成立、人口の増大、衛生状態および住宅条件の悪化、急速な階層分解などの現象が、一八五〇年代になって、もっとも一般的にあらわれたからであると思われる。われわれは、産業革命という言葉によつてむしろ一八五〇年代までに、英国全土が産業経営や技術の面で、一様に革命的な変容を蒙つたかの如き錯覚におちいるとすれば、それは明らかに誤りであり、日本の社会経済史学者が、地方的、産業的な視点からの分析を等閑に附している結果にはかならない。

いまひとつの理由として、著者ポラードは、シェフィールドという産業都市の歴史について、刃物業を中心とする軽工業から、機械金属工業への発展変貌を追究しながら、シェフィールドという一都市の個性・特殊性の認識を強調するあまり、イギリス資本主義の帝国主義への移行、つまり産業資本の段階から金融資本の段階と

いう把握が充分でないため、時代区分の点などで必ずしも客観的であるとは思われない。この点は、徳永氏の評価ともほぼ一致している。つぎに、著者のシェフィールドの労働者階級の状態にかんするおどろくべき実証的な把握であるが、利用しうるあらゆる史料を縦横に駆使して、刃物業中心の軽工業から、製鉄業、機械産業および兵器産業などの重工業への推移を、きわめて詳細に描いており、大恐慌、不景気そして戦争という十九世紀末から今世紀初頭にかけての労働者階級の生活条件の変化を明らかにしているが、とくに一八九〇年代における独占資本主義の到来、従つて熟練を基礎とする軽工業部門よりも、機械による大量生産を主とする重工業部門の圧倒的な重要性にともない、共済的もしくは労働力制限機関としてのシェフィールドの地方的職能別組合 (trade society) の衰勢と、それにかわる合同 (Amalgamation) および連合 (Federation) を基礎とする産業別組合への志向などの描写は、従来の運動史にみられない分析の鋭さを示してくれる。

最後に、本書の非常にすぐれていると思われる点は、たんなる労働運動史ではなく労働者階級の状態の歴史であり、労働者階級をも含めてシェフィールドの勤労階級の生活が、微に入り細にわたつて探求され、その生活程度を、ただ賃金とか労働時間とかの労働問題一般に解消してしまうのではなく、上水道、下水問題、住宅、公園などの環境衛生などにたいする当時の住民の努力を、労働者階級の生活水準の問題と結びつけて論じているのは、まことに卓見で

あるといわなければならない。

あまりにも克明な研究であり、筆者の読後感としては以上簡単にふれたところであるが、われわれはやはり日本人として、こうした研究がわれわれに訓えるところは、労働問題にたいする接近の仕方と中小企業の矛盾など、たんにイギリスのある特殊都市の問題といふのではなく、案外われわれが住んでいる地方、あるいは都市などの研究と決して無縁ではありえないことを感じないわけにはゆかない。と同時に、わたくしは本書を読み終つて、何よりも日本の社会経済史が、今少し現実的な問題意識の上に立つて、労働者階級の歴史に関心を払うべきであると考へたのであるが、これは筆者の偏見だろうか。

(一) Sidney Pollard; *Nineteenth Century Co-operation, from Community Building to Shopkeeping* (Essays in Labour History, in memory of G. D. H. Cole, edited by Asa Briggs and John Saville, pp. 74-112.)

三田学会雑誌、一九六〇年一〇—十一月合併号、拙稿(書評)参照。

(二) フリックスの書評は、*Economic Journal*, March, 1961. 徳永重良氏の書評は、「経済志林」第二九巻第一号(三六年一月)所収。

(三) この点については三田学会雑誌第五四巻第八号(三六年八月)

号)所収、拙稿「イギリス産業革命史研究についての覚え書」を参照されたい。 —一九六一・七・一六—

ジョン・ウエイズ著

『モーゼス・ヘス——空想的社会主義者』

(John Weiss; Moses Hess, Utopian Socialist Detroit, Wayne State University Press, 1960, pp. 77.)

野地洋行

—

若きマルクスの研究が盛んになったことと関連して、モーゼス・ヘスも再び検討の対象となった。つまりマルクスやエンゲルスは、ヘスやグリュンの真正社会主義を批判することによって、自分たちの中の観念論的要素を清算し、科学的社会主義を形成していったのである。

ヘスと、マルクス、エンゲルスの関係は浅くはない。一八四二年、マルクスにライン新聞の編集局へ参加することをすすめたのはヘスである。同年、エンゲルスに、ヘーゲル左派は論理的に共産主義に向わざるをえないことを教えたのもヘスである。エンゲルスの

伝記者グスタフ・マイヤーはそれを認めている。更に、ロレンツ・フォン・シュタインと共に、フランス社会主義のドイツへの最初の紹介者たる榮をもつヘスは、——ヘスの研究者ツロンスティによる——同時にマルクスにとってもまた、フランス社会主義への案内者だったといわれる。

注1 「マルクス年譜」(M. E. L. 研究所編、岡崎・渡辺訳、青木書店、十八頁)もまた、これを裏打ちするように、一八四二年の十月十二月頃、マルクスははじめてフランス社会主義文献に接した、とある。だが、本格的な研究はその頃からとしても、最近の研究ではマルクスとフランス社会主義との接触が、もっと遡られることがある。だがこの点に関しては、まだ資料的に全く未確認である。

ヘスはまた、一時マルクス、エンゲルスの協働者でもあった。フランス社会主義の紹介者たる実を示すかのように、ヘスは一八四五年に、マルクス、エンゲルスとともに「十八世紀以降のフランスとイギリスにおける社会主義と共産主義の歴史」という翻訳シリーズを計画している。しかも、本書の著者ウエイズによると、意外に知られていないが強調されねばならない事実がある。それは、ヘスが、ドイツ・イデオロギーの一部分を書いている、ということだ。しかも、彼自身、その代表者の一人であった真正社会主義を批判している部分である。(p. 45) (p. 72, note 6)

だが、他方、「共産党宣言」における「ドイツ社会主義または真

して、ことに数多くはないアメリカでのドイツ社会主義研究の一つとして興味があるのでとり上げてみた。

二

要約してみよう。本書は序文の他に、次の三章からなる。

- 一、モーゼス・ヘスと「人類聖史」。
- 二、真正社会主義者。
- 三、ユートピアニズムと科学主義の間で。

一八四六年——一八七五年におけるモーゼス・ヘス。ヘスは一八三六年、「人類聖史」をかき、ヘーゲル左派として出発した(第一章)。一八四二年——四六年は、彼の真正社会主義者としての時期であるといわれる。真正社会主義は、ドイツ観念論哲学をフランス社会主義に直接結びつけようとする考え方であるが、ヘスはカール・グリュンとともに、まさにこれを代表している。ヘスは、ヘーゲルをバリヘ、フブーフをヘルリンへ導こうとしたのである。ドイツ哲学とフランス社会主義との関係は、理想と現実、理論と実践、哲学と政治、などの関係と考えられ、これらの統一、止揚が、ヘスのいう意味での弁証法であり、ひいては、真正社会主義の内容だったのである(pp. 24—5)。

だが、ヘスにおける理想と現実、理論と実際とは、あくまでもヘーゲル的であった。ヘスは次のように考える。経済学者と神学者はそれぞれ、「精神なき肉体の世界」と、「肉体なき精神の世界」を作

正社会主義」での痛烈な批判を想起すれば十分なように、マルクスは、ヘスを徹底的に克服されねばならない対象として捉えている。それでは、マルクス、エンゲルスとヘスを結びつけたものは何であろうか。そして、何が彼らを決定的に分離したのであるか。それは、マルクスとヘスとの、具体的な思想交流の究明の中ではじめて答えられる問題であるが、ヘスへのわれわれの関心はこの点から出発する。

ヘスの研究としては、テオドル・ツロンスティ⁽¹⁾の古典的研究やルカーチ⁽²⁾、およびホルニヒ⁽³⁾の研究があったが、戦後エドマンド・シルバナー⁽⁴⁾の研究や、彼の編集による書籍集が出されている。

- 注1 Zlocisti; Moses Hess, Der Vorkämpfer des Sozialismus und Zionismus, Berlin, 1921.
- 2 Lukács; Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik, Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XII, 1926.
- 3 Cornu, Auguste; Moses Hess et la gauche hégélienne, Paris, 1934.
- 4 Silberner; Moses Hess, an annotated Bibliography, New York, 1951.

——; The Works of Moses Hess, Leiden, 1953.
——; Moses Hess, Briefwechsel, 1959.

本書は、最近盛んになってきたアメリカでの思想史研究の一つと

書評